明治宮殿と近代和風

Keywords
明治宮殿　近代和風
車寄せ　和洋折衷

K09037　　國府田槙之介

1.　研究背景

明治維新をきっかけに、日本に西洋化の流れが起こった。建築の分野でも西洋からの影響を受け、それまでの日本にはなかった建築様式が取り入れられることにより、建築物は変化していく。西洋風の建物が増える一方で、日本風の意匠や伝統的な日本古来の技術を活用しつつも、近代的な要素や洋風の意匠を取り入れた「近代和風」と呼ばれる建築物が明治から昭和初期にかけて多く建てられた。こうした和洋折衷の近代和風の先駆けとなり、その後の建築物に影響を及ぼしたのが、明治21年に竣工した明治宮殿である。

日本という国の権威を国外に示し、それまでとは異なる天皇の暮らし方を求められた明治宮殿は、外観が和風、室内装飾は和風を主体としながらも内部に洋風の生活様式である椅子座を採用している。

明治宮殿がそれ以前にはない和洋折衷の建築となった要因の一つに、当時、明治宮殿の装飾担当として、欧州に渡り家具の調達を任されていた片山東熊とその取引相手であったドイツ・ハンブルグの装飾家J.D.Heymannの影響があったことが平成22年度の原正彦氏の芝浦工業大学大学院修士論文によって明らかとなっている。

2.　研究目的

本研究では、片山東熊とJ.D.Heymannの動向を追い、明治宮殿の意匠的特徴をつきとめ、明治から昭和初期にかけて建てられた近代和風建築と比較することで、明治宮殿の意匠がその後の近代和風建築に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

3.　研究方法

(1) 宮内庁書陵部、東京都立中央図書館特別文庫室木子文庫にて明治宮殿関連資料の調査を行う。
(2) 調査した資料から明治宮殿の意匠的特徴を明らかにする。
(3) 全国に点在する近代和風建築のうち、車寄せを有する建築物を選定する。
(4) 明らかにした明治宮殿の特徴と選定した近代和風建築を比較し、明治宮殿が近代和風建築に与えた影響を考察する。

4.　明治宮殿について

明治6（1873）年の江戸城焼失後、赤坂離宮を仮皇居としていたが、典礼や儀式に支障をきたすようになったため、新たな皇居の造営が計画された。明治15（1882）年、皇居御造営事務局が設置され、明治21（1888）年10月27日、旧江戸城西の丸・山里地区にて落成を迎えた。計画段階では、本丸に永久的（洋風）宮殿が造営されるまでの仮宮殿として計画されていたが、竣工後はそのまま本宮殿となった。

図1 明治宮殿　正殿

図2 明治宮殿　中庭

明治宮殿が計画から竣工まで長い年月がかかった理由の一つは、近代の天皇にふさわしい皇居とはどのような建築であるか議論され、洋風にするのか、和風にするのかといったことが検討されたからである。

明治宮殿に求められていたのは、明治以前とは異なる新しい天皇の住まいとしての形であり、特に内部空間については、近代の暮らしに合わせ、新たな仕様や意匠を考える必要があった。また、近代的な謁見や国賓を迎えての典礼など、宮中儀礼の洋風化に対応するため、和風の骨格に洋風の要素を加味した内部空間が創出された。

一方で、天皇が長い歴史を持った唯一無二の存在であることを示すための江戸時代以前に行われていた宮中儀式の存続を考慮して、外観や平面、意匠に内裏（京都御所）が意識されていた。

5.　片山東熊とJ.D.Heymannについて

和風の御所派と明治政府の宮殿派の間で意見の対立があったことから、明治宮殿が着工に至るまでには和風と洋風の計画案が交互に提案された。明治14年には、当時、お雇い外国人として日本の建築分野で従事していたジョサイア・コンドルが、海軍中将榎本武揚の命を受け、旧江戸城西の丸・山里地区の地質調査を行うとともに、洋風の山里正殿の設計も委託され明治15年7月に計画案が完成した。同年には皇居造営事務局が設置され、総裁に太政大臣三條実美、副総裁には榎本武揚が抜擢され、洋風宮殿建設への体制が整えられた。

しかし、明治15年8月12日に榎本武揚が清国全権公使として転出し、後任に宍戸璣が就任すると、

「御造営ノ結構ハ曩ニ概略議定スト雖トモ爾来
其筋ニ於テ猶亦模様換リノ内議アリ未タ実地起
工ニ至ラス」

と、皇居造営録にあるように、この頃に計画変更があったことが伺える。総額1000万円にのぼる予算に計画変更を余儀なくされたと思われる。

結果、明治宮殿は和風の木造宮殿として建てられることになった。しかし、実際に竣工した宮殿は外観こそ和風であるが、内部に関しては和風の要素を取り入れつつも椅子座を採用するなど、洋風の特徴を見てとることができる。和風の木造宮殿として計画されたにもかかわらず、内部空間に洋風の特徴が見られるのは、先にも述べたように天皇の新たな住まいのあり方が模索されたとともに、宮中儀礼の洋風化に対応するためである。

図3 片山東熊

内部空間をそれまでなかったような、和洋折衷の空間にするため、家具などの装飾品は洋風の物が使用されたが、その装飾品をヨーロッパから輸入する際に担当として派遣されたのが、片山東熊であった。

片山は師であるJ・コンドルが手がけた有栖川宮邸建設の際に有栖川宮熾仁親王に随行して渡欧し、室内装飾品の調査・発注に当たったことが評価され、明治宮殿建設でも室内装飾担当に任命され、現地での装飾品の調達を任された。

現地で片山と実際に装飾品の取引をしていたのが、J.D.Heymannである。Heymannは当時のヨーロッパでは有名なドイツの装飾家であり、ルーマニアの首都ブカレストの宮殿やシナイヤ宮殿の装飾を手掛けた。

明治宮殿が和風の木造建築として計画されたにもかかわらず、内部空間に洋風の特徴が見られるのには、片山東熊とJ.D.Heymannが和風の木造宮殿に洋風の装飾を施すため、計画を変更させたことが大きな影響を及ぼしていると考えられる。

6.　近代和風建築について

明治から昭和初期頃に多く建てられた近代和風建築は、全国に存在しており、洋館や木造の和風建築、明治宮殿のような和洋折衷のものなど、様々な様式が取り入れられ、日本の急速な発展を象徴している。震災や戦災、老朽化に伴う取り壊しで、数が減ってはいるものの、未だ多くの近代和風建築が残っている。その数は、未知数ではあるが、近年では各都道府県が積極的に調査・保護に乗り出しており、指定文化財等に登録されているものも少なくない。

中でも、華族住宅と呼ばれる建築は、位の高い華族が自らの住まいとしてだけではなく、来賓を招くための場としても建てた大規模な邸宅で、規模が大きく、装飾も豪華なものがある。

図4 中島知久平邸

図5 毛利邸本館

7.　調査

①第一回調査　2013年7月25日
宮内庁書陵部にて、皇居造営録及び皇居御造営誌の資料調査と収集
②第二回調査　2013年9月4日
東京都立中央図書館特別文庫室にて、木子文庫・明治宮殿の図面資料収集
③第三回調査　2013年9月26日
皇居御造営誌の資料調査と収集

8.　資料分析

宮内庁書陵部での調査で得られた、皇居御造営誌において片山東熊とJ.D.Heymannのやり取りが記されている。そのやり取りの中で、Heymannは明治宮殿に洋風家具を配置するうえで当時の計画に内在する以下のような問題点を挙げている。

「夥多ノ引戸御設置ノタメ装飾品配置ニ適スル壁僅少ナルコト」
「各御室面積ノ割合ニ其高サ低キコト」

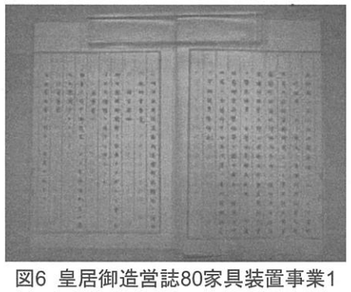

図6 皇居御造営誌80家具装置事業1

この指摘の後、当初計画されていた天井高は、洋風家具を使用するのに適切な高さに変更され、それまでの日本の建築の特徴である引戸の多さも、洋風家具を使用するための障害となることが指摘されていることから、引戸を減らし壁を増やしたと思われる。

研究指導：伊藤洋子　教授

Shinnosuke KOUDA

9. 明治宮殿の特徴

調査から得られた明治宮殿の特徴は以下のようなものである。明らかにした特徴と近代和風建築とを照らし合わせて、影響を考察していく。

- 和風の外観
- 折り上げ格天井などの和風と敷物や彩色文様の貼り付けなどの洋風を組み合わせた室内装飾
- 暖炉とその周辺の装飾
- 瓦屋根に煙突
- 椅子座の生活様式と洋風家具及び洋風の装飾に合わせた天井高や壁の配置

10. 明治宮殿と近代和風の比較

10.1 比較対象

表1 比較対象一覧

建設年（年）		建物名	都道府県
元禄	?	鍋島家住宅→後に増築	長崎
明治	19	協和館	佐賀
	24	諸戸家住宅（玄関座敷・広間）	三重
	25,26	岡山後楽園鶴鳴館・鶴鳴館本館（旧吉川家住宅）	岡山
	29	上杉記念館（旧上杉伯爵邸）→大正 14 に再建	山形
	32	旧五二会ホテル玄関棟(地蔵院)	三重
	43	太閤園淀川邸(旧藤田徳次郎)	大阪
	44	小樽市公会堂(旧小樽区公会堂)	北海道
大正	5	強首樅峰苑	秋田
		八木家住宅	京都
		毛利邸本館	山口
	6	披雲閣	香川
	9	笠置館	京都
	12	平田家住宅	大分
	13	野田市市民会館(旧茂木佐平治邸)	千葉
昭和	3	飯塚家住宅	群馬
	4	栗田正文家住宅	神奈川
	6	旧・中島知久平邸(中島新邸)	群馬
	9	琴平町公会堂	香川
	11	十州楼	愛知
	15	後藤家本家住宅	宮崎

近代和風建築は全国に多く残っており、その全てを把握するのは困難である。老朽化や自然災害、開発の影響で多くの建築が取り壊されているが、歴史的、建築的価値のあるものも多く、近年では各都道府県が「近代和風建築総合調査」を行っており、現在では33の都道府県で調査報告書が作成され、報告書がまだ発行されていない県についても調査が進められている。建築的価値の高いものについては各都道府県で2次調査ないしは3次査として詳細に調査され、報告書としてまとめられている。本研究では詳細に調査された建物のうち、車寄せを有する近代和風を比較対象とする。各都道府県の報告書にまめられた近代和風のうち、車寄せを有するものをまとめたものが表1である。

選定した近代和風建築の建設年代を見ると、明治宮殿の落成した明治21年より前に既に竣工を迎えている建築が存在する。それらの近代和風は明治宮殿の影響を受けているとは考えられない。また、明治宮殿竣工後間もなく完成しているものも影響を受けているとは考えづらい。これらに注意しながら明治宮殿と近代和風を比較していく。

10.2 例1. 中島知久平邸（群馬県）

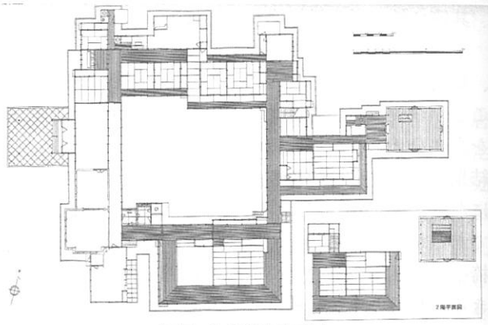

図7 中島邸平面図

群馬県太田市に現存する中島邸は中島飛行機創始者である中島知久平が両親のために建てた大規模な住宅である。後に会社の宿舎としても利用されている。

中島邸と明治宮殿を比較すると、規模は違えど、よく似た特徴を見てとることができる。格天井や長押など和風の意匠的特徴が見られる一方で、シャンデリアを吊るし、板張りの床に洋家具が配されるなど、装飾品は洋風の物を使用していることがわかる。また、洋風家具を用いることに加えて、椅子座の生活様式に合わせるために、天井が高くなっている。外観についても、中島邸の車寄せは明治宮殿の車寄せと酷似している。

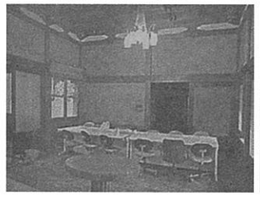

図8 中島邸玄関棟

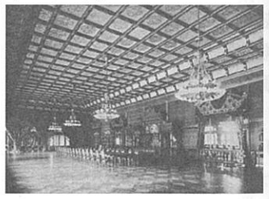

図9 明治宮殿饗宴所

中島邸の設計は明治宮殿の造営に関わっていた宮内省内匠寮出身の伊藤藤一である。伊藤は内匠寮時代、上司の木子幸三郎のもと、明治41年～42年には梨本宮邸、同43年～44年には北白川宮邸の建築に関与している。宮邸の室内装飾は明治宮殿の影響を受けており、特に梨本宮邸は大きな唐破風車寄せを有し、様々な和洋折衷技法が試みられている。

伊藤は明治宮殿の造営に関わっていないものの明治宮殿の影響を受けた宮邸の建築に関与している。また、梨本宮邸、北白川宮邸の設計主任であり、伊藤の上司であった木子幸三郎は、明治宮殿の設計施工に関わっていた木子清敬の息子であり、明治44年には明治宮殿の室内装飾を任されていた片山東熊と共に竹田宮邸を設計している。

伊藤自身が明治宮殿の造営に直接関わっていたわけではないが、伊藤を取り巻く環境からも間接的に明治宮殿の影響を受けていたと考えられる。

図10 明治宮殿

図11 梨本宮邸

図12 中島邸

10.3 例2. 鍋島家住宅（長崎県）

鍋島家住宅は佐賀藩藩主であった鍋島氏の住宅であるが、長崎県雲仙市国見町神代に位置している。当時は鍋島藩の飛び地として神代地区が治められていたために藩主屋敷として鍋島家住宅が建てられた。主屋は複数棟からなり、「御北」が元禄期（1688～1703）、「中二階」と「御座」が明治22年、玄関・台所・「表二階」が昭和4年に建設されている。また、元禄期に建てられたとされる長屋門も残されている。明治以前に建てられた武家屋敷と明治時代に入ってから建てられた近代和風建築からなる神代地区において鍋島家住宅は中心的な建物として扱われてきた。

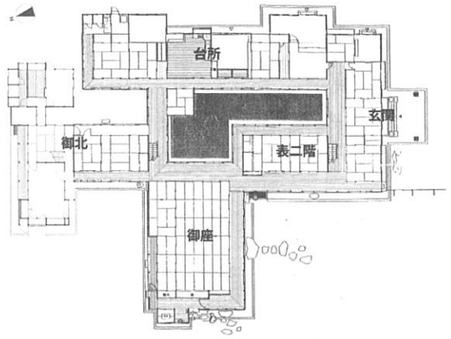

図13 鍋島家住宅平面図

元禄期に建てられた御北と長屋門を軸として、武家造の特徴的な平面構成や配置を崩さないまま増築がなされている。欄間や天井などの造作は丁寧に作られてはいるが派手さはなく、豪華絢爛な明治宮殿のような装飾は見られない。

図14 鍋島家車寄せ

車寄せを見ても、大きな唐破風は形状が似通っているが、明治宮殿の破風で見られるような細かな装飾は見られず、非常にシンプルな車寄せである。

10.4 例3. 協和館（佐賀県）

協和館は明治19年に県の公会堂として旧佐賀城の北堀端に落成した。佐賀の発展と共に所有は県と市の間を行き来し、現在は解体され部材がわずかに残っている程度である。

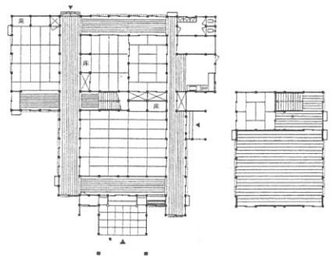

図15 協和館平面図

図16 車寄せ

図17 唐破風

唐破風の大きな車寄せは明治宮殿のものとよく似ているが、明治宮殿が竣工を迎える明治21年以前に落成しているため、明治宮殿の影響を受けているとは考えられない。蟇股や懸魚などの装飾を見比べると、協和館のものの方が細かな彫刻が施されている。明治宮殿は、懸魚の装飾は彫刻が施され、豪華さが表れているが、蟇股は内側に菊の紋が入っている程度で、豪華絢爛な明治宮殿の中においては、比較的地味な装飾となっている。

11. 総括

明治維新後、日本の建築は洋風の影響を受け、江戸時代以前に培ってきた和風の技術や意匠と融合させることで近代和風という日本独自の建築物をつくり上げた。明治宮殿が近代和風建築の先駆けとなり、象徴的な建物となったことは間違いない。特に和風の外観に和洋折衷の内部空間という特殊な構成は、その後の日本の建築界に大きな影響を及ぼしている。一方で、明治宮殿の影響は受けずに建てられた建物もある。そうした建物はそれまで日本の建築として発展してきた和風の色が強く表れており、江戸時代に有力な大名が治めていた地域によく見られる。しかし、そうした建物も後には洋風の影響を受け、和洋折衷の建物へと変化していくのである。

参考文献

- 小野木重勝著「明治洋風宮廷建築」1983年　相模書房
- 小沢朝江著「明治の皇室建築　国家が求めた〈和風〉像」2007年　吉川弘文館
- 鈴木博之監修「皇室建築　内匠寮の人と作品」2006年　建築画報社
- 山田由香里著「長崎県雲仙市国見町神代、旧鍋島家住宅の増改築の様相―図面・資料帳等の検討を基に」2008年
- 小谷彩華・宮本雅明著「旧佐賀城北堀端の近代における景観の変遷」2005年
- 大川三雄著　文化庁文化財部監修「月刊文化財　特集　近代和風建築　和風大邸宅に見る近代の諸相」2001年　第一法規
- 「佐賀市史（旧版）：上巻」1945年　佐賀市総務部総務法制課